ポーランドの概要とワルシャワ日本人学校

平成１９年度派遣
名寄市立豊西小学校　工藤芳晴

ポーランドの概要

１　国土の概要

「ポーランド共和国」は中部ヨーロッパの北部に位置し、ヨーロッパでは７番目の面積を持つ国で、イギリスとアイルランドを合わせたほどの大きさです。日本より小さく、九州と四国を除いた大きさと同じくらいになります。「ポーランド」（ポーランド語では「ポルスカ」）という国名は、「ポーレ」（平野、耕地）という語に由来し「平原の国」を意味します。現在人口は約３８６０万人で首都ワルシャワの人口は約１７０万人です。

２　気候

緯度が高いため冬は厳しく、長く感じられます。だからこそ３月下旬から４月の春の訪れは感動的です。人々はイースター（復活祭）と共に春を待ちわびます。４月までは肌寒い日が多く、特に夜は冷え込みます。４月に雪が降ったことがありました。ところが５月に入ると、急に初夏を思わせるような暑い日が続きます。一気に夏が来たという感じです。６、７月は気温も上がり、最高気温は３２度前後になります。現地の学校も６月末で夏休みとなり、７、８月はバカンスの時期となります。しかし湿度が低いため、日陰に入ると涼しく、日本のような蒸し暑さを感じることはあまりありません。急に冷え込むこともあります。夕立が多いことも特徴です。この時期になるとポーランド人はサイクリングを楽しみます。ポフシンの森などへ行き、日光浴やバーベキューをするようです。日照時間はとても長く、夜８時を過ぎても明るいです。（３月の末から１０月の末までがサマータイムとなります）

８月の末になると、秋の気配が漂います。秋は街路樹が紅葉し、「黄金の秋」と呼ばれる素晴らしい季節です。そして、日が短くなり始めます。雪は１１月頃から降り始めますが、根雪になるのは１２月以降です。たくさん積もるということはほとんどありません。積雪の際も朝早く除雪車が走るので、大きな幹線道路では歩道も車道も大きな心配はありません。日が暮れるのが最も早くなる１２月ごろは、３時過ぎに辺りが真っ暗になってしまいます。気温もぐっと下がり、マイナス気温の日が続きます。寒さは厳しくマイナス１５度～マイナス２０度になることもあります。耳や頭が切れそうな程痛くなるので、帽子は欠かせません。外へ出かける時には、マフラー、帽子、手袋、頑丈な靴、ダウンなどの防寒着が必要です。特に子どもたちは、雪だるまのように着ぶくれして出かけます。しかし、家の中は集中暖房でどの部屋も暖く、半袖シャツ１枚でも過ごすことができます。冬は暖房のせいか、特に乾燥します。２月も中旬を過ぎると寒さの峠を越し、日照時間も次第に長くなっていきます。

３　ワルシャワと戦後のポーランドの歴史

２０世紀の激動を、最も見守った街はワルシャワといっていいでしょう。１９１８年には悲願の国家独立を果たしたのも束の間、１９３９年ナチス・ドイツがポーランドに侵攻し、ワルシャワは５年間も占領されました。その間、人口の３分の１を占めていたユダヤ系市民はゲットーに強制移住させられ、多くが飢餓と重労働のために亡くなり、ゲットー蜂起で立ち向かったもののほとんどが戦闘に倒れ、生存者の多くは強制収容所へ送られました。これに続いて１９４４年ワルシャワ市民とポーランド国内軍がついにナチスの暴虐に武器を持って立ち上がったのがワルシャワ蜂起です。第二次世界大戦で街の８５％が壊滅状態となり、ソ連軍によるワルシャワ解放時の街の状態は広島と同様だったといわれています。（写真はワルシャワ蜂起の記念碑）

大戦を生きのびた市民は、戦後の社会主義政権の政府を頼らずに、不屈の精神で街の再建に手弁当で取り掛かりました。現在の中世の町並みは戦前と寸分たがわぬ姿で、がれきの山から築かれたものです。しかし、３分の２までが失われた市民の命と３８万人でにぎわったユダヤ人コミュニティは二度と戻りませんでした。

戦後はソ連主導の統一労働党による一党支配の政権下で社会主義国としての道を歩き始めました。東西冷戦の緊張が高まるにつれ、軍事費はかさみ国家経済に過大な負担となり、各地で暴動がおきるなど国民の生活は苦しく、政治への求心力も失われました。自主管理労組「連帯」の議長になったワレサは一党独裁の支配からの脱却をめざし、その忍耐強い活動は全国１千万人もの組合員に広がりをみせました。

１９８１年１２月１３日は、ポーランド国民にとって忘れがたい戒厳令が布かれた日です。ヤルゼルスキ将軍が軍事と政権の両方を握り、広がる「連帯」の活動を抑えました。１９８９年に連帯の忍耐強い努力によって、政府と反体制指導者が集まり円卓会議が開催され、その結果「連帯」は合法と認められ、初めての自由選挙が決定されました。「連帯」は圧倒的な議席を獲得し、戦後初めて非共産主義政権が誕生し、９０年「連帯」のワレサはポーランド初の選挙によって選ばれた大統領に就任しました。

９０年代になって民主化と市場経済の導入に向けて、新生ポーランドが誕生しました。その歩みは決して順調ではないものの、国は確実に経済的な苦境を脱しました。９０年に何千人もの人々が文化科学宮殿の周りの路上で物を売り始めるという現象が起こりました。限られた棚の商品を並んで買うのでなく、手に取って選んで買う、これが市場経済への第一歩でもありました。国営企業の民営化は分野によっては成果が上がっていないものもあり、雇用の保障、農業政策などではかえって昔の方が安定していたという不満も聞かれます。１９９９年にＮＡＴＯに加盟し、２００４年５月にはＥＵに加盟しました。２０１０年以降には、ＥＵＲＯ（ユーロ）の導入も検討され、今後も経済、司法、環境保全などＥＵ基準に合わせた国内改革への取り組みがのぞまれています。

４　経済

ポーランド経済は現在、かつてない速さで動いています。民主化と市場経済を取り入れて２０年。ポーランドの１年や２年は日本の５年ぐらいの速さに感じられます。

経済危機の影響もほとんど無く、ワルシャワではオフィスビルやホテル、マンションの

建設ラッシュがつづいています。ポーランドの急速な経済発展はまさにミラクルチェンジといえるものの、人々の意識は急激な変化に追いつかない面もあり、サービス業など店により人により「売ってやる」という態度であったり、欲しいものの有無をたずねても思い切り「ニェマ！（ない）」と返すだけという日本人にとってはショッキングな対応をされることがありましたが、それも少なくなってきています。徐々にではありますが、英語で対応してくれる店も出てきました。

５　政治

ポーランドの政党や政治勢力は、大きく分けて右派―左派、そして都会―地方という２つに分かれますが、かつての右派と左派の代表、反共産勢力であった連合選挙連帯行動（ＡＷＳ）も、旧共産党の流れを汲む社会民主連合（ＳＬＤ）も、ともに勢いがありません。０５年秋の総選挙では、中道右派の連立を組む「法と正義」（ＰＩＳ）と「市民プラットフォーム」（ＰＯ）が過半数の議席を確保し首相にカチンスキー氏が就任しました。また、大統領選でも首相の兄のカチンスキー氏が勝利し、大統領に就任しました。しかし、０７年秋の総選挙では、「市民プラット」（ＰＯ）が大差で勝利し、新しい首相が就任するなど、政局もどんどん動いています。

６　宗教・文化

ポーランドの人々の９０％以上はカトリックで占められています。町や村の建物でまず目に付くのが教会です。ワルシャワ市内には現代建築の粋を集めたようなモダンな教会もありますし、ひっそりとした田舎にも非常に立派な教会があります。宗教の影響が社会生活の中ではそれほど強く感じられない日本から考えると、カトリック信者と聞いただけでストイックな信仰の姿を思い浮かべるかもしれません。ポーランド民族の歩んできた苦難の歴史は常に教会とともにありました。ソ連支配下の社会主義政権の時代に、民衆の声を代弁すべく個人の尊厳と自由を求めて抵抗を続けたのが教会の聖職者たちでした。ヴィシンスキ首座司教は投獄され、「連帯」運動を支えたポピェウシコ神父は秘密警察によって虐殺されました。（写真はワルシャワでの聖体祭）

ポーランドを語る上で忘れてならないのは、ポーランド生まれのローマ法王ヨハネ・パウロ二世（1978～2005）の存在です。ポーランドではパピエシ、あるいはヤン・パヴェウ・ドゥーギと呼ばれ、ポーランド人の心の拠り所とされています。ローマ法王にはイエスの第一の弟子ペテロが、ローマに渡っての伝道半ばで、皇帝ネロの迫害に遭いヴァチカンの丘で殉教した遺志を引き継ぐ役割があります。殉教の地がヴァチカンのサン・ピエトロ寺院で、ここには多くのポーランドの人々が団体で巡礼に訪れます。９９年に法王はポーランドに里帰りを果たし、ワルシャワ中にヴァチカンの旗がはためき、野外ミサに列席する人のために交通規制が取られるほどでした。０２年８月には、引退説がささやかれるなか、再度里帰りをしました。これは、ポーランドのＥＵ加盟を強くバックアップするねらいがあったようです。０５年の法王死去に際しては、その死を悼んで２００万人を超えるポーランド人がヴァチカンへと赴きました。

ポーランドに始まった社会主義国家の崩壊は東欧革命のドミノ現象として、旧ソ連まで

もが倒れる結果になりましたが、これはローマ法王の存在なくしては考えられないことでした。ローマ法王はカトリックの総本山であるばかりでなく、ヨーロッパ世界のオピニオンリーダーであり、ヨーロッパの戦後の復興にも尽力するなど、歴史的経過からみてもヨーロッパ文明のアイデンティティと言えるでしょう。

７　ポーランドの食事

１７世紀のポーランドはリトアニアと連合王国となり、今日ポーランド料理の定番となったピエロギ（洋風ギョーザ、ラビオリ、ダンプリング）はリトアニアや中国料理の影響を受けているといわれています。スープは料理のスターターとしてポーランドでは欠かせないもので、中でも「ジュレック」というライ麦粉に香辛料を入れて発酵させた素朴な味は、ポーランド風味噌汁とでもいうのか日本人の口に合うものです（写真右）。

赤カブを煮込んだ「バルシチ」もあります。ロシア料理として知られる野菜や肉を入れたものは「ウクライナ風バルシチ」と呼ばれます。

「ビゴス（写真下）」はザワークラウト（酢漬発酵キャベツ）に豚肉やソーセージなどを加えて一つの鍋で煮込む家庭料理で「猟師のシチュー」ともいわれています。ポーランドでは肉料理といえば豚肉が中心であり、大衆レストランでの定食に最もよく出されるのはポークカツレツ（コトレット）で山盛りのジャガイモにキャベツの付け合わせがつきます。牛肉に関しては西欧諸国の狂牛病や口蹄疫の影響は公式には報告されていません（０５年現在）が、牛肉の消費量は下降ぎみです。

８　治安・安全情報

ワルシャワは、東京などの日本の都市と比べると静かで緑の多い街ですが、民主化以後、貧富の差が拡がって犯罪は増加傾向にあり、治安は決してよいとはいえません。一般的に外国人は狙われやすいので注意が必要です。スリ、置き引き、車の盗難、車上強盗、空き巣、強盗などがあります。空き巣においては、外国人が多く住む住宅地に被害が多いようです。物売りやセールスで訪問する人がいますが、この中には空き巣を狙って下見を試みる場合もあります。

電話の応対についても、確認できない相手に自分の名前や住所を名乗ったり、在宅・不在の時間を告げることは避けています。これらの注意は子ども達にも徹底させ、特に「家に今誰がいるか」の問い合わせには応じないように教えます。

公共交通機関は混雑時や荷物の多いときや疲れている時、現金の引き出しや両替をする時は十分な注意が必要です。レストランなどでバッグを床や椅子に置いたり、財布の入った上着を椅子にかけていた間の盗難はしばしば起こります。人前で金銭を数えないとか、バッグにお金を入れるのを見られないようにするといった用心も必要です。クレジットカードを使用しての買い物の後も注意が必要です。冬は日没が４時頃と早く、暗くなってからの外出には徒歩ではなく、タクシー・自家用車を利用します。

車の盗難も、発生しています。盗難は駐車中ばかりでなく、信号待ちなど停車中に運転者をむりやり連れ出したり、気を引いたり、助けを求める振りをして車を奪う場合もあり

ます。日系企業の車両盗難なども発生しました。そこで、盗難防止アラーム、ハンドルロック等を必ずつけ、また盗難保険にもこちらで加入しています。また、学校周辺でも車上強盗の被害が報告されています。信号待ち中に歩道から若者にガラスを割られ、バッグなどを奪われるというものです。助手席などに荷物を置かず、トランクにしまったり、シートの下に入れるなど、荷物が人目につかないような工夫をする必要があります。

旅行者も含め、日本人が盗難などの被害に遭った率が高いのは、在住しているワルシャワではなくクラクフ・グダニスクなどの観光地に多く、バスやトラムでの事故がやはり多いです。万が一、盗難にあった場合は、すぐ警察署に出向いて届出をします。クレジットカードの場合はすぐに停止の手続きを取ります。クレジットカード、各種証明書や免許証の再発行には警察の証明が必要になります。警察署でポーランド語しか通じない場合には、英語の通訳を手配してくれます（写真右は警察車両）。免許証の紛失は大使館領事部にも届けます。大使館領事部は時間外や休日でも電話の応対をしています。

９　現地校・国際学校の状況

ポーランドでは２０００年９月１日から新教育制度が導入され、日本と同じ６－３－３制が施行されました。ポーランドの小学校は７才の９月から始まり、日本より半年、アメリカより１年遅いことになります。

現地の学校や幼稚園の他に、インターナショナル系の学校としてはアメリカン・スクール、ブリティシュ・スクール、フレンチ・スクール、カナディアン・スクール、ドイッチュ・シューレ、ロシアン・スクールなどがあります。アメリカン・スクール、ブリティッシュ・スクールは高等部も併設しており、ＥＳＬクラス（英語を母語としない子弟のための語学指導クラス）を設置しているため日本人子弟も受け入れています。中にはモンテッソリ・メソッドに基づく指導の幼稚園もあります。

日本人未就学児は現地やインター系（新学期９月、写真右）の幼稚園・保育園に通っています。４月入学の日本と比べ、現地の小学校は日本より半年遅く入学し、インター系は逆に半年早く入学する違いがあります。

現地の幼稚園は、３歳から小学校入学前までの園児が年齢別に分けられています。保育時間は園によって違いますが、朝８時から午後４時位までの間で対応しています。入園の手続きは、４月中旬に申し込み用紙を提出し、空きがあれば中途入園も可能です。通常新学期９月から入園となりますが、人数の都合でウェイティングとなる場合もあります。費用は、保育料・給食費（朝食・昼食・おやつ）などを含めて、現地の幼稚園や保育園は１か月１～２万円程度のようです。私立の幼稚園になると、月に５万円程度かかるところもあります。アメリカン、ブリティッシュの幼稚園の授業料は年間約１５０万円程度で、他のインター系幼稚園では月額約４～６万円程度のところもあります。

ワルシャワ日本人学校の教育

ワルシャワ日本人学校は、創立以来３２年がたち、１０年春で３３年目に入ります。２度の校舎移転を経て現在の校舎は、三つ目にあたります。この間、ポーランドが急激な発展をとげているのと同様、日本人学校もめざましく変容してきました。２００１年の春には、ワルシャワ市南部の静かな住宅地に移転しました。

現在の場所に移転してから、グランドの拡張、ブランコや雲梯等の遊具の設置、花壇の設置と桜の植樹、壁のペインティング、体育館借用など、施設面の充実は著しいものがあります。Windows Vista搭載のパソコンも整備され、インターネット常時接続のパソコンが授業で１人１台ずつ使えるようになりました。また、デジカメ、スキャナなどの情報機器も充実しています。また、防犯用の監視カメラが設置され、モニターでの常時監視が可能になっています。「移転した当時には何もなかった。」ということを移転当時に派遣されていた職員から聞いたこともありますが、現在では、学校としての設備が十分整っています。

ハード面だけではなく、教育内容の発展にも胸をはれる実績を残してきました。「個の輝く学校」を目標に、個に応じた基礎学力の定着、英会話教育の充実、読書指導の拡充、コンピュータ活用能力の向上、コミュニケーション能力の育成などを図ってきました。少人数であることを最大限に生かした教育内容は、極めてレベルが高くなっているといえます。そして、随所に多くの成果が認められると高い評価を得てきました。

週２時間、外国人講師による英会話の授業を習熟度別クラスで実施してきました（写真右）。最近実施した英語検定・児童英検、漢字検定でも好成績をあげることが出来ました。さらに、精選された新刊図書など、蔵書を充実させる一方、図書室を利用しやすくするため、本年度図書室内の書架の配置換えを行いました。その結果、図書室がより使いやすくなり、読書量も増えています。低学年でも、自分の体験と照らし合わせて読書感想文を書けるようになってきました。

また、ワルシャワタイム（全校朝会）などを通し、コミュニケーション能力の育成に力を入れてきたため、「人前で話すことが苦手だったけれど、この学校に転入してからは、ワルシャワタイムの発表、校歌の伴奏、学習発表会など人前で発表する機会がとても多いので、最近ではあまり緊張しなくなった。」と、自信を持ちはじめた子どもたちの声をよく耳にします。夏休み明けに各クラスで実施している自由研究・作品発表会、学年末のパソコン等を使った生活科・総合学習発表会（写真右）は、相手を意識した発表方法を工夫するなど、表現力アップが認められます。

その他にも、全校体育の授業として、施設を借りて水泳教室（４～９月、写真左）やスケート教室（１１～２月）を実施しています。夏に行われる日本人会との共催による運動会では、一般の競技のほか、よさこいソーランやよさこい鳴子踊りなど、日本的な芸能を披

露し、好評を博しました。

学習発表会では、普段の学習の成果を見ていただくという趣旨の下、生活科発表、国語科発表、算数科発表、体育科発表、英語劇、音楽のステージなどに加えて、和太鼓演奏も披露しました。

野外活動、修学旅行・遠足のほかにも、ゲストティーチャーを迎えての特別授業も実施しています。また、ワルシャワ大学日本学科の学生や修学旅行における現地小・中学校との交流も、遠足などの行事や総合的な学習の時間を使って行っており、「開かれた日本人学校の創造」が具現化してきていると自負しています。

七夕や節分などの日本の年中行事をささやかながら祝うことがあります。日本の学校よりも日本的、と評される由縁です。日本人会主催の秋祭り（写真右）では、縁日を模した屋台が出店、子どもたちが焼きそばやおでんなどに舌鼓を打ち、ヨーヨー釣りや輪投げなどに興じました。餅つき会も行います。

「本物に触れさせる」「体験を重ねることが力になる」。教職員一同、常に心がけていることです。毎年、プロの演奏家を招いて、音楽鑑賞会も開いています。ＮＨＫ大河ドラマ「風林火山」の挿入歌を演奏したワルシャワフィルハーモニーオーケストラの方や、ピアニスト根津理恵子さんをお招きして行いました。

日本の学校では経験できないであろうこともしばしばあります。全日本男子バレーチームとの対面（写真右）や卓球の福原愛さんの試合観戦などが実現しました。日本国大使館を毎年のように訪問して学習することもできました。また、大統領夫人より招待を受け、大統領宮殿で世界各国の子どもたちと交流することもできました。ＪＡＰＡＮ　ＷＥＥＫのオープニングセレモニーや、国際子どもの日イベントに出演し、和太鼓演奏、よさこいソーランを披露し、ポーランドの方からも好評を博しました。

世界に向けて発信している本校のホームページへのアクセスも多く、それを見て、本校に興味をもち、訪ねてこられる方もいます。

その他、広報活動として、毎月末に学校新聞「シレナ」を発行し、保護者はもとより日本人会の方々や関係機関にお送りしています。さらに、学級だよりを定期的に発行し、保護者に学校や子どもたちの様子をより分かりやすく伝える努力をしています。

近年、ポーランドでは、ワルシャワ以外の都市に日系の企業が増え、学齢期の子どもの数では、ワルシャワ外の子どもの総数がワルシャワ内の子どもの総数を上回るという現象が起きています。日本人学校はワルシャワにしかありませんので、他地域の子どもたちは、現地校やインターナショナルスクールに通学しています。本校は、これら地域に住む子どもたちの学習を支援する拠点校としての立場も担っています。また、子どもたちが学習で活用できるように、３０周年記念セレモニーに合わせて、社会科副読本「チェシチポルスカ」を作成しました。子どもたちや関係機関、商工会などに配布しました。教職員一同、子どもの実態にあった研究に力を注ぐことに心しています。

順調に学校が発展し、日々子どもたちの笑顔があふれているのは、教職員の自助努力はもとより、保護者や学校運営理事会の理解や協力も欠かせません。さらに、文部科学省や大使館、日本人会関係の皆さんのご尽力があってのことと、教職員一同、心からの感謝の気持ちでいっぱいです。

以上、学校の特徴の良い点ばかりを述べてきましたが、もちろん悩みや心配事がないわけではありません。３０数人の児童・生徒しかいない小規模校ゆえの悩みも多々あります。日本の公立学校とは違い、学校経営を授業料に頼る割合が高くなります。児童・生徒の減少は、経営基盤を揺るがしかねません。充実した教育内容を保障するために、入学金・授業料の値上げをしたり、為替の変動の影響を除くため、授業料等の徴収をズウォティ建てに変更しました。

子どもの数が少ないということは、その分、子どもたちの交友関係も狭まります。特定の子どもとしか勉強や遊びができないのも事実です。幅広い人間関係を形成していくには限界があります。校庭以外の外で遊ぶ機会は、ほとんどありません。

ハード面での制約も数多くあります。日本の学校のように、十分な備品や書籍が揃うわけではありません。インターネットが常時接続されたとはいえ、インフラ整備が十分でない現況では、その接続に故障が伴うことは避けられません。ポーランド語でのやりとりが不十分な派遣教員は、現地の各業者との電話連絡など、戸惑いと困難を抱えたままです。

冬の寒さは、やはり厳しいです。抵抗力のない子どもたちが熱を出し、感冒が流行します。夏は、温暖化の影響か、３０度を超える日も何日か続きます。１０年ほど前には、突然の心臓病のため派遣教員が急逝するという悲しい出来事がありました。数年前の初春には、風邪をこじらせた保護者が日本へ緊急帰国し入院。２人の子女もそのまま帰国することになりました。「命だけは取り返せない。どんなことがあっても子どものそれは守る」。どんなことが起こっても不思議ではない在外の地において教職員が何にも増し、肝に銘じていることです。（写真は冬のワジェンキ公園）

最後に、学校や教職員の財産は、子どもたちの心身の成長にほかなりません。日本人学校で学んだどの子どもたちも、ここでの学習と生活を誇りにし、日本で、あるいは諸外国でさらに飛躍してほしいと願うばかりです。子どもたちが次のステージで活躍し、輝くための土台をつくることが、ここでの役目なのかもしれません。つまり、日本人学校がゴールではないと思うのです。それは、日本からの派遣教員にとっても言えることです。この学校で体験した教育活動を糧にし、帰国後に再び日本の小中学校の教壇で生かしていってほしいと願っています。

日本・ポーランド子どもの日イベント　ヴィラヌフ宮殿にて